

最短のハーフマラソン

瀬戸内の潮風を頬に受けながら、私は、たくさんの人に交じって、ゆっくりと準備体操を始める。

蒲刈県民の浜では、平成二十一年から「呉とびしまマラソン」が始まった。瀬戸内海のしまなみを眺めながら走れるこのマラソンコースは、多くの人の関心を呼び、第一回大会から千六百名の参加者を集めた。私もその中の一人で昨年この大会の五キロコースに参加した。そして、今年、私はハーフマラソン（二一・〇九七五キロメートル）の部にチャレンジする。

スタート時間が迫るにつれ、私はこみあげる寂しさをますます押さえきれないでいた。それは、一年前、このハーフマラソンに出ることをともに決意し、約束していた岡さんの姿がなかったからだ。

私が岡さんと出会ったのは、一年前、こうしてスタート前に準備運動をしていた時、言葉を交わしたことがきっかけだった。岡さんは山口の人で私よりも十歳年上の五十一歳。岡さんは、子どもの頃から病弱で激しい運動はできず体育の時間も見学することが多かったそう。そんな岡さんにとって走ることは、自分には縁のない遠い世界だと思っていたそう。けれども、五十歳になるのを期に健康のために町内の運動公園でウォーキングを始めた。そこでは自分よりもずっと年配の人たちが、

「タイムは問題じゃないんだよね。わしらはいつも制限時間ぎりぎりさ。それでも、ゴールテープを切る瞬間は最高なんだ。」

そう言うって、目を輝かせてウォーキングを楽しんでいる人たちの姿に接し、自分も大会に出ることを決心されたのだそう。走り始めてから一年半後、岡さんの記念すべき初レースで私たちは出会ったのだ。初めてのレースでゴールテープを切る岡さんのうれしそうな表情を今でもよく覚えてる。そしてこの日、岡さんは、私に

「来年、私は、あの豊島大橋をわたるハーフマラソンの部に挑戦しようと思えます。」
と宣言した。

その心意気を感じ、私もハーフマラソンに挑戦することを決め、一年後の再会を誓った。それから今日まで私は、ハーフマラソンを岡さんとともに走破することを目標に、今日までトレーニングを続けてきた。仕事に疲れてつい練習をさぼっていると、不思議と岡さんからメールをもらった。今日も私は岡さんの励ましで、ここに立っている。

呉とびしまマラソン大会コース



ところが、大会二か月前に岡さんが緊急入院したとのメールを奥さんから受け取った。内容をみて、私はショックを受けた。病名は悪性リンパ腫。ガンの一種で、一昔前なら助からない病だ。けれども、奥さんの話では、化学療法と放射線治療の組み合わせで現在は治療可能な病気なのだろう。本人も闘病生活を覚悟しているが、私と約束していたハーフマラソンに出られないことをとても残念がつているという内容だった。

スタート十五分前。スタートライン付近に移動した私の肩をとんとんとたたく人がいた。振り返って、私は驚いた。目の前に岡さんが立っていたからだ。

「驚かせてしまったようですね。無謀だとは思ったんですけどね……。来てしまいました。」

そういつて岡さんは笑った。顔色はよくない。一年前と比べると明らかにやせている。しかし岡さんは約束どおり私の目の前に立っていた。

（どうしてそんな無茶なことを。私との約束のためなら申し訳ない。入院していたんじゃないのですか。）

いろいろな思いが私の頭の中で渦巻いた。しかし、言葉が出てこない。そんな私に岡さんは静かに手を差し出してきた。握手を交わしたのだが、手を握る力が弱々しい……。とまどう私に岡さんは

「とにかく行けるところまで行きます。そうすることです。いったんけじめをつけたかったですよ。」

と話した。

（岡さんといっしょに走ろう。）

私はそう心に決めた。スタートの号砲が鳴り響く。走り始めた岡さんの表情は明るかった。足取りもしっかりしていたが、走っているとは言いがたいスピードだった。二百メートルくらい行ったところで歩き始め、しばらくすると再び走り始める。その繰り返しでたどり着いた二キロメートル地点。岡さんは静かに胸のゼッケンをとり、コースから外れた。そして、コースに向けて深々とお辞儀をした。

スタートからわずか二キロメートル地点で終わった。私の知る限り、最短のハーフマラソン。この二キロメートルのためにわざわざやってきた岡さんの本当の思いはどこにあったのか。私自身には想像することすらできなかった。ただ、このとき静かにすき通るようなまなざしで遠くをみつめていた岡さんの横顔を、私はとても美しく感じた。

この日から三年後、このコースに戻ってきた岡さんは、私といっしょにハーフマラソンの部を二時間二十八分五十六秒で完走した。